

Global×Innovation人材育成フォーラム（第4回）

令和6年8月30日

【小路座長】 皆さん、こんにちは。座長を拝命させていただいています、小路と申します。それでは、定刻となりましたので、第4回のGlobal×Innovation人材育成フォーラムを開催させていただきたいと思いをします。

改めまして皆さん、大変御多忙の中、御出席いただきまして誠にありがとうございます。

早速ですけど、まず事務局から、委員の皆さんの出席状況と配付資料について御説明お願いいたします。

【保坂留学生交流室長】 事務局でございます。本日は、委員の皆様全員に御出席をいただきました。会場では小路座長、伊藤委員、大槻委員、田中委員、日色委員、廣津留委員、正宗委員の7名の委員が、また、オンラインでは南場委員、藤井委員、Pezzotti委員、前川委員、吉岡委員の5名に御出席いただいております。

オブザーバーは文部科学省の局長と、経済産業省からは、藤木局長の代理として経済産業政策局の今里産業人材課長が出席しております。

また、事務局に交代がございました。留学生交流室長として下岡に代わり、私、保坂が着任いたしました。どうぞよろしく願いいたします。

配付資料は議事次第に記載のとおりであり、事前にメールでお送りするとともに文部科学省ホームページも掲載しております。

以上です。

【小路座長】 ありがとうございます。それでは続きまして、第2回以降の議事録につきましては第1回の議事録の確認の際、公表形式について皆さんに御了解をいただきましたので、今後は委員の皆さんの確認完了次第、事務局より順次公開をさせていただきたいと思いをします。これにつきまして皆さんに御確認をいただきたいと思いをします。よろしいでしょうか。

（「異議なし」の声あり）

【小路座長】 ありがとうございます。それでは、今後そのように対応していただくようによろしく願いいたします。

では、引き続きまして議事に入ります。本日も関係者ヒアリングといたしまして、企業

関係者の方に本日は、おいでいただく予定だったんですけど、台風の影響でオンラインでお話を伺うこととさせていただきます。

東京大学と海外インターンシップに取り組んでおられますダイキン工業株式会社から、人事本部採用グループ専任部長の東風晴雄様、そして同じく人事本部の人事企画グループ長部長の野間友恵様をお願いをいたします。

それでは、早速ですけど御説明よろしくお願ひいたします。

【東風氏】 御紹介ありがとうございます。ダイキン工業の東風でございます。本日はこのような貴重な機会を頂戴し、厚くお礼を申し上げます。

さて、当社ダイキン工業はこれからの変化の激しい時代に、これまで同様の自前主義では勝ち残れないという経営トップの危機感のもと、オープンイノベーションを目指して産学協創を進めてきております。その中で大学様との人材交流の一環として、学生さんを対象にグローバルインターンシップを実施してきました。これまで実は大阪大学さん、同志社大学さんなどともグローバルでのインターンシップを実施してきましたが、本日は2018年に産学協創を締結させていただき、ひときわ大きな規模で実施しております、東京大学さんとの取組の中でのグローバルビジネスの現場を経験していただくグローバルインターンシップについて御紹介をさせていただきます。

資料は、弊社の野間から御説明させていただきます。

【野間氏】 ダイキンの野間と申します。私自身も学生時代にオーストラリアに1年弱、留学をしまして、マレーシアにも2か月のインターンシップを経験しまして、その後、ダイキン工業に入社をいたしました。そうしたことも踏まえながら、企画実行を進めてまいりました東京大学さんとのグローバルインターンシップについて御紹介していきたいと思ひます。

連携をスタートしました1年目から、この取組をスタートしまして、これまで113名の学生さんが海外拠点に滞在しまして、コロナ禍でのオンラインでの取組を含めまして、250名近くの学生さんにグローバルビジネスの課題解決というのを経験していただいた取組になります。世界の変化のスピードや、価値観の多様性というものを肌で感じていただき、刺激を受け、また、学生さん自身、すごく意識も変わって大きく成長してくる姿を拝見してまいりました。学生さんにとっても私自身も含めて、ダイキンのメンバーにとっても学びや、刺激を多く受けてきている取組になります。

最初に、なぜグローバルインターンシップを実施することになったのかというところ、

経緯、背景を御説明いたします。東大とダイキンが連携をスタートしたキーワードの一つはグローバルになります。東大はグローバルでのブランド力、位置づけというのを向上していきたい強い思いがおりであったこと、また、この本フォーラムの課題認識とも重なりますが、大学生の内向き志向というのが強まる中でいかに海外経験の機会を提供し、グローバルで活躍できる人材を育てていくのかという課題がございました。

一方で、右側に記載しておりますダイキン工業ですけれども、当社は180か国以上に事業展開をしましてグローバルの生産拠点は100か所以上、海外従業員比率は8割以上という状況の中で、今後の事業発展に向けまして社内外との協創を含め、新しいイノベーションを生み出したい強い思いがございました。

そういった中で協創をスタートしまして、東京大学の教職員の皆様とお互いの課題、やりたいことを議論しまして、東大とダイキンだからこそできる、実現できることは何かというところを考えてまいりました。その中でダイキン工業の海外拠点でのグローバルビジネス、社会課題のリアルというのを経験していただき、視野を広げ、視座を高める挑戦の機会を提供できるのではというところで、グローバルインターンシップをスタートいたしました。

次に、グローバルインターンシップの特徴に関してですが、インターンシップといえますと、就職活動の一環というイメージを持たれていらっしゃる方も多いかもかもしれませんが、就職活動でのインターンシップとは全く違うプログラムになってございます。1つ目の特徴ですが、東大とダイキンの共同プログラムということでして、東大の教職員、ダイキンの幹部から若手、日本人、外国人問わず、一体となってお互いの考えや思いを掛け合わせまして企画運営をしてございます。東大、ダイキン双方の組織対組織の人材交流と新たな価値創造につなげていこうという取組になっております。

2つ目でございますが、世界で活躍できるグローバル人材の育成を目指しております。インターンシップの中では、学生さんにダイキンが直面しているリアルなビジネス課題に向き合ってもらいます。正解や解き方がある受験勉強の世界とは全く異なる、日々変化をし、正解のないグローバルビジネスの世界というのを体験していただきます。その経験を通じましてグローバルな視野を持ち、多様な価値観を理解できる人材の育成につなげていこうとしております。参加学生の学部や学科、学年は全く問わないプログラムになっております。

3つ目でございますが、東大とダイキンだからこそ実現できる多様性あるプログラムと

いうことをごさいます。世界中に拠点があるダイキン工業の特徴を生かしたプログラムになっておりまして、実施しております。インターンシップで考えて提案してもらうテーマというのを設定しておりますが、環境問題やマーケティング、商品戦略、人材マネジメントなど当社の経営課題というものを設定しております、学生さんのためのテーマというのの設定をしておりません、当社が実際に直面しているテーマというのを実際に取り組んでもらうように設定しております。それに加えて、東大の先生方の知見というところとダイキンのビジネス経験というのを掛け合わせましてレクチャー、現地調査、ディスカッションなどを組み合わせたプログラムになっております。

最後に、渡航費、滞在費、全額ダイキンが負担しております、学生さんに対しましては国内の事前セッション、2週間程度の海外滞在、帰国してからの最終報告会まで4か月程度、プログラムに対して深いコミットメントを約束していただいているプログラムになります。

このインターンシップでは、ダイキンのグローバル拠点を訪問して活動していただきます。2019年には10か国、22拠点を訪問してもらうなど、多様な地域、拠点を訪問してもらっていることがお分かりいただけるかと思えます。また、学生さんの指導や視察も含めて教職員の皆様にも参画いただいております、教職員の方にグローバルのビジネスの最前線を体験いただく機会にもなっているかと思っております。

ここで少し動画を御覧いただきたいと思えます。2019年にグローバルインターンシップを開始しまして、その後グローバルインターンシップのPR動画というのを作成しまして、学生さんにとってどんな経験になったのかというところ、少しまとめておりますので御覧いただければと思えます。2019年に作ったものですので、売上げなど数字は少し古い数字であることを御了承いただければと思えます。

(動画再生)

少し資料に戻らせていただきまして、ここまで全体像というのをお話しさせていただきましたが、実際のどんな渡航をして、どんな活動しているのかというところを少し詳しく、ここからお話しさせていただこうと思えます。

初年度の2019年ですが、48名の学生さんに参加いただきました。プログラムの内容としましては2種類のプログラムを実施しました。1つ目ですが、世界一周型のビジネス提案のインターンシップになります。米国、ベルギー、ベトナム、中国の各拠点を3週間で訪問いただきまして、将来に向けた製品や顧客価値、企業風土を考えてもらうプログラムを実施

しました。もう一つのプログラムは、地域滞在型のインターンシップになります。拠点に2週間滞在しまして、その地域、文化、事業にどっぷり浸っていただきながら、ビジネスの課題解決や新しいアイデアの提案をしていただくものになります。

世界一周、地域滞在共通で事前セッションとしまして、日本での工場見学や、事前のワークショップを実施しました。また、テーマについて事前にリサーチや考えていただくということもしまして、海外渡航後は東大、ダイキンの幹部も出席のもと、最終報告会を実施しております

3週間で世界一周をするインターンシップの行程を少し御紹介したいと思います。世界一周のチームは2つのグループに分けて活動、提案をしてもらいました。一つはグローバルで通用する空調の製品や、新たな顧客価値というのを考えていただく製品・顧客価値チームというもの、もう一つは、ダイキングループの人を基軸におく経営の次の発展を考える人基軸チームという2つに分けて活動いただきました。

まず、米国からスタートしまして、ヒューストン、ニューヨークを訪問しまして、米国でその当時、2番目の広さを誇る工場を視察していただきまして、その後、ニューヨークに行き、日本とは全く違う住宅や空調事業というのを学ぶために実際の住宅なども見学をしていただきました。その後、ベルギーに行きまして、ブラッセルにありますダイキンヨーロッパの本社や工場などを視察、現地の技術者とのディスカッションを通じまして欧州の環境規制の現状などを肌で感じてもらいました。

その後、ベトナムに渡りまして、成長市場であり、アメリカや欧州とは全く異なる空調市場の状況を体感いただきました。エアコンの販売店を訪問し、営業メンバーへのヒアリングなども実施しました。最後は中国になりまして、上海、蘇州、深圳の3都市を訪問しまして中国市場の勢いというのを感じていただくとともに、中国の若い社員、ベンチャー企業の経営者などとも交流をしていただき、最後に帰国後には提案をまとめて報告いただきました。参加した幹部からは、社員からはなかなか出てこないような斬新な観点とアイデアということで、絶賛されるような提案、報告をしていただきました。

次に地域滞在型ということで2週間、同じ国や拠点に滞在して活動する地域滞在型について御紹介いたします。2022年の活動を少し御紹介したいと思います。米国に訪問したメンバーは幹部メンバーから北米の事業環境を最初に学びまして、工場見学、空調販売店の業者を訪問したり、ニューヨークではビルや住宅を訪問したりしまして市場を把握してもらいました。その上で、米国事業の今後の発展について提案をまとめていただきました。

タイに訪問したメンバーにつきましては、Z世代に当たる若いメンバーの空調機に対する意識を知ってもらおうということで、大学など若者が集まる場所でヒアリング調査をしていただきまして、また、現地を知ってもらうということで社員宅を訪問したり、現地の生活事情を体験したりしていただいた上で、現地メンバーとのディスカッションなどしながら、若い世代に響く空調とはどういうものかというところの提案を進めていただきました。

これまでのグローバルインターンシップの実績、実施状況でございますが、2019年にスタートし、翌年からコロナということで海外渡航ができず、オンラインに切り替えたときもございましたが、東大のグローバル化推進、グローバル人材育成というのを狙いに継続して取組を実施してきております。海外渡航の経験者は合計113名になっておりまして、今年度も31名が8月、9月に海外渡航を実施予定にしております。

一番下のブルーの四角に今年度のテーマを記載しておりますが、今年度からは共同研究を実施している研究室の教授の推薦で、空調やエネルギーなど、より専門的なテーマでのグローバルインターンシップというのも新規でやっていく予定にしております。

次に、参加した学生さんの感想を少し御紹介したいと思います。1つ目としましては、旅行では絶対に経験できないような世界というのを、現実感というのを肌で感じる、そして視野が広がる経験だったということでございます。テレビなどで見ていた世界とは全く違う異世界というのを見まして、それぞれの土地の成長や発展のスピードというのも肌で感じ、刺激を受けてられました。自分自身、すごく狭い世界にいるなというようなことを体験した、実感したという声も多く聞かれました。

2つ目としましては、人生・将来を考えるきっかけになったという声が大半でした。世界を見ることで自分自身の強みや課題というのを客観的に知り、自分自身が何をしたいのかというのを考えたということであったり、世界の厳しさというのを考えると、もっとチャレンジしたり、努力していきたいというような前向きな行動につながっていると思っております。

3つ目には、一緒に活動したチームのメンバーや現地のメンバーなど、多様なメンバーから多くの学び、気づきを得た経験になっているようです。これだけいろんな人に出会った経験というのは人生初めてだったというような感想もございまして、そこから多くの刺激、学びを得たと感想を聞いております。

参加者の参加後の声というのを御紹介したんですが、今回この事例の紹介をさせていた

だくに当たります。5年前の2019年にグローバルインターンシップに参加した学生さんがその後どうしているのかと、どんな影響があったのかというところも東大さんに御協力いただきながら追跡アンケートというのをしたところ、インターンシップの経験というのが現在の進路に影響しているということを言っている学生さんが大半でした。グローバル人材として成長するために海外留学を決意したとか、海外に携わる仕事をしたいという思い、また、起業するという意識が強くなったような声も多く聞かれました。プログラムに参加した学生さんで向上したスキルとしましては、異文化に対するアジリティが向上したということや、語学、リーダーシップ、海外志向などが向上したと答える学生さんが多かったような状況でございます。

私自身も学生さんと接する中ですごく感じていることですが、グローバルに興味があったり、留学したいけれども就職や学業に影響するのではということで、ちゅうちょしたりする学生さんも増えているように感じますが、このインターンシップでは二、三週間という短期間の滞在ではございますが、海外のビジネスの厳しさとともに面白さ、また、日本の立ち位置というような、旅行では決して感じられないものというのを感じて、その後の自分の将来につながるような行動に移している人が多いように思います。

最後に、グローバルインターンシップの価値についてですが、幹部、若手メンバーなどいろんな方が取り組む取組でございまして、学生さん、教職員の方々の交流から対話やアイデアが生まれ、お互いの組織や人、課題に対する理解が深まり、それが両組織の協創につながっていると思います。

東大にとっては、学生さんのグローバルでのビジネスを経験することによって視野を広げ、グローバル人材とは何かを考えて、将来のありたい姿や、今後のアクションが明確になるきっかけとなっていると考えております。

ダイキンにとっては、協創を通じた学び、刺激というのが大きいと考えております。現在、直面しているビジネス課題というのは答えのないものばかりで、学生さんの率直な疑問であったり、鋭い提案から課題の本質に気づかされたりと、交流から刺激を受け、学ぶ機会になっているなどと考えております。今後も、このグローバルインターンシップですが、参加人数や訪問拠点など工夫、拡大しながら実施したいと考えている取組になります。

以上で、私からの御報告は終わりとさせていただきます。御清聴ありがとうございました。

【小路座長】 東風様，野間様，大変貴重な御説明ありがとうございました。

それでは，委員の皆様から御質問，コメント等ございましたらお受けしたいと思います
が，まず今日，コラボ先の東京大学の藤井先生，いらっしゃっておりますので，藤井先生，
コメントありましたら，最初 にかがででしょうか。

【藤井委員】 ありがとうございます。東風さん，野間さん，どうもありがとうございました。
大変お世話になっております。

今お話もありましたように，ダイキンさんと東京大学とで，2019年よりこのグローバル
インターンシップというのをやっております。学生の間からも非常に人気の高いプログラ
ムでありまして，最近400名とか，それぐらいのオーダーの学生が応募してきており，セ
レクションを行って人数を絞らざるを得ない状況です。

この場でも以前も議論していますように，学生がこういった海外の体験ができる，ダイ
キンさんの場合は特に企業でのビジネスの現場，あるいは生産の現場を目の当たりにでき
るということで，グローバルな体験の入り口として刺激を受け，その後，また恐らく長期
にグローバルな，あるいは海外での経験に関わっていくといったようなきっかけをつくる
プログラムになっていると考えてよいと思っています。

一番印象に残っていますのは，最初の頃に中国に行っていた学生さんが，中国の社会の
非常に活気のある，いわゆる右肩上がりといったような状況を目の当たりにしてきたとい
う感想を述べていたことです。今の日本の中で暮らしている私たちは，そういう社会の状
況というのを実際に肌で感じることはなかなか難しいわけです。世界のいろいろな国々の
現場を見ることによって，これがいかに多様であるかという認識，あるいは日本の社会の
中での体験だけでは得られないような感覚というものは，海外の現場に行き，実際に触れ
ないと，なかなか得ることができないんだなということを私たちも感じましたし，何より
も学生の皆さんがそれを強く感じて，これがまた彼らの，次のステップにつながっていく
ということで，学生の皆さんの今後のキャリアの在り方に大きくインパクトを残し得るプ
ログラムだろうと思っています。それが1点です。

それから，企業と大学との間で，まさに組織対組織で，ここ5年以上連携をさせていただ
いていて，このように相互の理解がしっかりある中で一緒に人材を育てていきたいと思います。
という形でプログラムをつくり込んでいるということが，重要なポイントかと思えます。

こういった信頼関係のもとで，人を育てるという観点で何をしていったらいいかという
議論が今後さらに広がっていくことを，私としてはぜひ期待をしたいと思えます。ダイキ

ンさんともそういった観点でまた引き続きご相談させていただければと考えているところ
です。どうもありがとうございました。

【小路座長】 藤井先生、どうもありがとうございました。

それでは、15分ぐらいお時間をとらせていただいて、人数少なくてすみませんけど3名方
ぐらいから御質問、またコメント等ございましたらお受けしたいと思います。いかがでし
ょうか。

吉岡さん、どうぞ。

【吉岡委員】 日本学生支援機構の吉岡です。大変刺激的な御報告ありがとうございました。
大変、東大生、羨ましいなと思いました。

その上で、ある意味ではごく技術的かもしれませんが、一つは先ほど藤井先生のお話にも
もありましたけども10倍ぐらいの応募の規模だということで、それを当然選考しなくちゃ
いけないわけですが、そのときの選考の、例えば英語ぐらいはできなくちゃいけないから
始まり、多分その意欲というのを見ていると思うんですが、そのときの一番重要な点とさ
れていることが何かというのが1点目です。

それから、もう一つは学部生、院生いるわけですが、内訳ですね。どんな感じの学部の
学生、例えば工学部が多いであるとか、経済で経営系のことに興味がある学生が多いかど
かという、それは大ざっぱで構いませんが、どんな感じの大学の中の専門を勉強している
学生が多いのかということ。

それに関連しますが、行った、帰ってきた参加者のその後で、その後の進路であるとか、
例えば学部を変えたとかですね。もちろん就職先のイメージも変わったりというのは随分
あると思うんですが、具体的にどんな感じの影響が出ているのかということ、これも差し
支えない範囲で結構ですが教えていただければと思いました。

以上です。

【小路座長】 ありがとうございました。これは藤井先生でよろしいですか、それとも
ダイキンさん。

【東風氏】 ダイキンからでよろしければ答えさせていただきます。

【小路座長】 はい、結構です。

【東風氏】 よろしいでしょうか。ありがとうございます。吉岡先生、御質問ありがと
うございます。3点御質問いただきましたので、一つ一つお答えしたいと思います。

1点目、10倍ぐらいの規模の応募がある中で、どうやって選考しているのか、選考の基準

は、みたいなどころですが、なかなか言葉にしづらいところはあるんですが、完成された学生、例えば語学力があって非常にいろんな知識があってという学生を選ぶよりは、これから伸び代がありそうな、非常に意欲を持ってグローバルに関心を持って自ら主体的に行動できるような、そういった方にできるだけ御参加いただきたいと思っております。そういう意味では学年とか、あるいは専攻とかに関わらず、幅広く見させていただいている形になります。

その中で最低限、語学力は必要ということで、これはネイティブの英語の教師で実際に学生と1対1の面談もさせていただいて、ある程度、現地でやっていけそうだということを確認した上で参加いただいています。ただ、何でしょう、チームで組んでテーマに取り組んでいただく中でお互いに助け合うといったところも踏まえて、全員に高いレベルを求めているわけではないということもございます。それが1点目のお答えになります。

2点目、内訳の、学部とか専攻の部分ですが、これは我々も多様な学生にぜひ参加いただきたいと考えておまして文理融合、最近是比较的、理系のほうが6割ぐらいの形で多いんですが、大体基本的には半々のイメージで選考させていただいております。本当に幅広く工学系から理学系、それから法学系、経済、あと文一、文二、文三と教養学部、分かれておりますけれども、そういったところからも幅広く御参加いただき、また性別もできるだけ男女半々ぐらいになるようにということも配慮させていただいております。よろしいでしょうか。

あと3点目、その後の進路ですが、我々も全ての学生を追いかけているわけではないんですが、いろんな形でコミュニケーションをとったりさせていただいております。そういう中で様々な進路に進んでいらっしゃる学生さんがいる中で、自ら新しい事業を起こしたいであるとか、何でしょう、ベンチャーみたいなどころでまず経験した上で、次に第2ステップとして例えば大手企業に就職しようであるとか、あるいはキャリア官僚を目指すであるとか、それぞれの学生さんごとにインターンシップに行く前よりも一段高い、グローバルな視野を持った上でキャリアを選んでいらっしゃる。その中でダイキンもぜひ選んでいただくことはもちろん、いとわないということで、選んでいただけるような機会も増やしていきたいなと思っているところでもございます。

以上でございます。

【小路座長】 ありがとうございます。藤井先生、よろしいでしょうか。

【藤井委員】 そうですね、一言だけ。この取組について、非常によいと考えているも

う一つの点は、最終報告会等で、ダイキンの皆様はもちろん、ダイキン以外の学外の皆様からもコメントをいただくということをやっていることです。これは学生たちがこのインターンシップの間にいろいろ考えたことを報告する場ですが、そこではかなりしっかりとしたディスカッションが行われており、これも彼らの学びにとって非常に大きな意味があると考えております。つまり、産業界あるいは学外の皆様とのインタラクションを通じての学びということになります。

【小路座長】 ありがとうございました。

それでは、あとお二方ぐらいと思います。大槻さん、どうぞ。

【大槻委員】 ありがとうございました。すごい学生にとって学びの機会で、すごいいなと思ひまして、私自身も大学時代にサマーインターンで海外に行かせていただいて滞在して、それもすごく大きなきっかけとなってグローバルでチャレンジしたいなと思えたのをすごく思い出しました。

それを思い出した上でですけど、実はもう、そのインターンはなくなってしまって、コロナも含めてだと思ひんですけど長い滞在がなくなってしまって、その会社さんに聞いたところ、予算の割にといいいますか、世の中にとってすごくいいことをしているとは思ひけれども、お金が高くて何か違う形にしていくことになったという話をされていて、何か一番初めに全部が就活で就職のためにやっているわけではないというか、採用のためにやっているわけではないという話があったりとか、あと、本当に意見がもらえるというところはあると思ひんですけど、何か数字を追っていたりとか、こういう結果で最終的には実は見ているみたいな指標がありましたらお伺ひしたいなと思ひて。

でも本当に、ただただ学生の意見をもらうためだけにやっているのか、それともこういう企業さんが盛り上げたりとか、すごくいい機会だと思ひていて、そういうのをやるために継続できる指標とかプラスなこと、あれば教えていただきたいなと思ひました。

【小路座長】 これはダイキンさんからお願いいたします。

【野間氏】 指標みたいところは持っていないんですけど、一つ大きいなと感じるのは、先生方にも教職員の方にも一緒に来ていただひていまして、指導もしていただひていまして、その中でレクチャーを現地ですていただひたり、現地のメンバーとディスカッションしてもらったりというところで、そこで新しい意見だったり、新しい観点というのが生まれているなと思ひていまして。その辺が今後、東大とこんなことやっていきたいねとか、世の中、こんなふうになっているんだな、みたいところが、学ぶというところ

が結構大きいかなというのは感じているところではあります。

あとは、インターンで取り組むテーマについてはテーマを出すところから幹部、トップ、各拠点のトップに関わってもらっていきまして、お遊びではないテーマというのを選んでいきます。その中で学生さんに本気で取り組んでもらい、出てきたアイデアというのを私たちも本気で受け取るような気持ちでやっております、実際にその後、担当しているメンバーが続けてやっていったようなテーマもありますし、東大さんとは学生さんのその後が見たいというようなこともおっしゃっていたりして、もうちょっと後に関わってもらえるようなテーマもやっていきたいね、みたいなところは今、議論しているようなところになります。

そういったところで新しい価値だったり、協創がどんどん加速していくのが大きい価値なのかなというところは感じているところではあります。

【大槻委員】 ありがとうございます。

【小路座長】 よろしいですか。ありがとうございました。それでは、あと時間の都合上、お一方ぐらい、よろしいかと。

日色さん、どうぞ。

【日色委員】 ありがとうございます。藤井先生にお聞きしたいんですけど、このような取組というのはダイキンさんだけでなく、どのぐらいの会社で、どのぐらいの人数といますか、幅で、東京大学で今、行われているか、もしざっくりとしたところあれば教えていただけないでしょうか。

【藤井委員】 ありがとうございます。ダイキンさんに最初にやっていただいて、数年間続けているわけですが、グローバルインターンシップという位置づけでは、ほかにも何社かお願いしているところがあります。具体的に言いますと、例えばクボタさんなども、組織対組織の連携の一環としてやらせていただいています。

大事なことは、冒頭にも申しましたけれども、企業と大学の間で、組織と組織で本気で一緒に人を育てていきたいと思いますし、プログラムを、教員もかなり関わってつくり込むということ。それから、グローバルインターンシップですのでグローバルな場、拠点で学生が一定期間過ごして、そこでの学びを得てくることができるといことです。まずはそういったパートナー、企業との間でこういったことをやろうと合意をしていくのが大事です。そういった意味で今、東大はほかに2社ほどとやっていると思いますが、段々にこのような取組が広がっていくことをぜひ期待したいと考えております。

【小路座長】 日色先生，よろしいですか。ありがとうございました。

それでは，まだ御質問あるかと思えますけど東風様と野間様，会議終了までこちらにいらっしゃると伺っておりますので，もし追加で御質問等ありましたら後ほどまたおっしゃっていただければと思います。それでは，まず。

【藤井委員】 座長，大変申し訳ありません。私がここで失礼をさせていただきます。

【小路座長】 そうですね。藤井さんが退室ということでありがとうございました。

【藤井委員】 ありがとうございました。失礼します。

【小路座長】 それでは，改めて東風様，野間様，ありがとうございました。

【東風氏】 ありがとうございました。

【野間氏】 ありがとうございました。

【小路座長】 それでは引き続きまして，次の議題に移っていきたいと思います。

前回も大変活発に議論をいただきましたが，中間まとめ（案）ということについて，これからの時間は皆さんにもんでいただければと思っております。

本日，皆さんから頂いた御意見，これまた，まとめまして取りまとめを進めていきたいと思います。皆さんにお送りした中間まとめ（案）ですけれども，私も座長として事前に意見を申し上げさせていただきました。ただ，私の意見が皆さんの賛同を得るかどうか，全然分かりませんので，事務局で線を引いていただいて原案を生かしております。ですから遠慮なく線を引いた原案，見消して言うらしいんですけど，のほうがいいということであれば，もう遠慮なくおっしゃっていただければと思います。

それでは，事務局から資料の説明についてお願いいたします。

【保坂留学生交流室長】 それでは，資料2から4まで事務局より御説明をいたします。15分程度ということでよろしくをお願いいたします。

それでは，資料2を御覧ください。これまでの本フォーラムにおける主な意見について，前回第3回会議での御意見を事務局で整理しまして太字下線つきで追記したものとなります。議論の振り返りとして御紹介いたします。

今回は資料の2ページ中段の3，御覧いただければと思いますが，取り組むべき解決策について多くの御意見を頂きました。中段，マインドセット，機運に関しましては，留学について明確な意思を持って挑戦する者に限らず，もう少し支援の対象を広げたほうがよい。また，何をしたいのか発見する手段が留学であるというような御意見。また，下段にあるとおり，ポジティブなPR戦略も一つの方策であるという御意見を頂きました。

経済支援につきましては3ページ目、移りまして中段以降、追記をしております。学部の学位取得のための留学をもっと充実してもよいのではないか、また、期間について1年は必要ではないかという御意見を頂きました。下段になりますが、開発途上国等でソーシャル事業に携わるインターンシップも非常に重要という御意見のほか、恒常的かつ継続的な留学支援の仕組みを考えられるとよい、また、国や民間企業が留学に対して支援をしたくなるような制度を充実すべき、企業版ふるさと納税や個人のふるさと納税等、既存の制度を活用する視点が重要との御意見を頂きました。

4ページ目、御覧ください。環境整備の初等中等教育段階について、下段にあるとおり、高校・中学の段階から国際的なものに触れる機会を増やすことが重要という御意見を頂きました。また、大学段階については、5ページ目に移りまして中段にあるとおり、職員の体制等を含め留学を促進する組織能力を高めるための大学への支援の検討、また、支援体制については、地域あるいは全国レベルでネットワークとして強化をしていくべきという御意見を頂きました。下段には博士課程の学生の留学に関する御意見も追記しております。

6ページ目、御覧ください。環境整備の中の産業界についてです。上段から、採用活動の長期化、早期化が気になって留学に踏み出せないということが起こっているという御意見を頂きました。また、留学経験者の採用評価、働き方などについて、フレキシブルな入社タイミングや専門性を持って仕事ができることが大事であるとの意見、留学を通じてどのような人間性が培われたかやリーダーシップを有する人、オリジナリティのある人などが評価をされるべきとの意見、また、留学経験で得たものをどのように企業、産業界で生かしていくかは大きな課題、人材の機会損失を企業として起こしているという旨の御意見を頂いております。

最後、その他についてですが、2ページ目で紹介した御意見と通ずるところがありますが、中間まとめのタイトル、見出しについては、全ての意欲ある若者とはしないほうがよいという御意見を頂いております。また、大胆な施策や大幅な予算など、国として強い意志を示さないと変わらないのではないかという御意見を頂きました。

次に、資料の順番前後して大変恐縮でございますが、先に資料4の説明をさせていただきたいと思います。前回の会議を中心にこれまで頂いてきた御意見などを踏まえ、また、小路座長、先ほどおっしゃっていただきましたけれども御覧いただきまして、具体的に筆を入れていただきながら前回の中間まとめ（案）を修正したものが資料4になります。反映版、見直し版の2種類御用意していますが以降、資料4-2、見直し版で主な修正点について御説

明します。

1ページ目、御覧ください。まず、中間まとめの名称、見出しの部分について、留学前の時点で明確な意思、志を有する方はもちろんのこと、留学を契機に意思、志を宿す後押しもしていく、そういった方も対象に含めて留学を促進していくというメッセージが伝わるよう、未来を創造し担う若者たちが世界に羽ばたける留学環境とチャンスをと修正をしております。また、それ以下、前文における課題認識や今後の方向性等に関する記載について修正をしております。

なお、留学生モビリティという言葉について、日本ではまだなじみがないというお声をお伺いすることがありましたので、OECD等で一般的に使用されている旨を含め、注釈を加えております。

2ページ目、御覧ください。中段にある括弧部分ですが、これも中間まとめの名称の修正と同じ趣旨で修正をしております。また、1の本文についても、若者の意欲を生み出し、一層高めていくにはであるとか、成長するチャンスが広く与えられるべきなどの修正をしております。以降、全般にわたって同じ趣旨、観点からの修正を加えております。

下段進みまして経済的支援、2の部分になります。一、二行目の修正も先ほどと同様、名称の修正と同じ趣旨でございます。下から3行目について、比較的短期間のものを念頭にとしていたものを、短期間のものから年単位のものを含めと修正しています。

2ページ目、御覧ください。2ページ目から3ページ目にかけて、各段階における経済的支援について記載しています。高校生などについては、3ページ目に入りまして2行目から、地方・地域に関わらず海外へ渡航できるよう、経済的支援の抜本的な充実が求められると追記をしております。大学院生の部分の記載につきましては、留学による人的ネットワークの構築、これに関する記載はありましたが、メタ認知の能力、総合知にもつながるような学びが望ましいということで追記をしております。

中段の3につきましても、名称の修正と同じ趣旨の修正でございます。

下段の4につきまして、各委員からの御意見を踏まえ、企業版を含むふるさと納税制度等、既存制度の一層の活用を促していくべき、また恒常的・継続的な留学支援ができるような仕組みの検討について追記をしております。

4ページ目、御覧ください。体制・環境整備についてです。5番目、1段落目と2段落目の記載内容を整理しまして、全体に修正を加えております。また御意見を踏まえ、語学力向上のみならずスポーツや文化を含む留学や海外研修等と追記をするとともに、民間企業・

団体などによるものも含めた多様な機会の提供ということについて追記をしています。

中段の6について、今回、高等専門学校を明記しております。これに合わせて、このほか文章全般に大学等とするなど関連する修正を施しております。

下段の7について、5ページ目に行きまして、例えば留学する学生数に応じて大学などが資金を得ることができるような仕組みにより、留学促進の機能を高めていくことが望ましいこと、また、留学支援の体制構築についてはネットワークとして強化をしていく視点も重要であることを追記しております。

中段から下段にかけての9です。資料の2、先ほど御紹介した委員の御意見を踏まえまして、前回は中ほど右側にございますように留学を評価するという書き方をしましたが、ここについて、留学経験において得られた成果としてのリーダーシップや専門性等の成果ということで具体の追記をしております。このほか、全体の記述を整理して修正を加えております。

下段の10、6ページ目に移りまして、上から4行目ですね。こちら、先ほどの修正と同趣旨ですが、留学等の経験において得られた成果ということをしかりと書くと。併せて最後の2行に、留学に関する広報、制度周知等を積極的に展開する、若者が自然と留学や国際経験を意識できる状況を作り出していく必要があると、こういう旨を追記しております。

以上、中間まとめ（案）の主な修正でございまして、これ、反映させますと5ページということで、簡潔に分かりやすいメッセージということでのまとめを目指して修正をしております。

最後に、資料の3に戻りまして御説明をさせていただきます。資料の3、留学・経済的支援の状況についてとなります。こちらですけれども、前回の会議の資料でもこちらの左側にあります現状、また、高校から博士後期課程までに至る、この図を資料として御準備させていただきました。これに加えまして、これまでに出された主な委員の意見ということで、右側に各段階についてどういった御意見を頂いたかということをもつて整理をしたものとなります。

大きく機会と費用と、これ、簡潔に書いておりますが、機会については機会提供、それに必要な環境の整備であるとか、そういったものに関するもの、右側の費用の部分については費用、これに関する経済支援等について関連する御意見を、たまに両方に枠がわたっている、これ、なかなか内容、分けづらいということでわたっているものがございまして、これまで御説明をした御意見あるいは中間まとめの記載ということと併せまして、このよ

うに整理をさせていただいております。

以上、資料2から4の御説明となります。

【小路座長】 よろしいですか。ありがとうございました。それでは、この中間取りまとめ（案）の内容につきまして皆さんの御意見を頂きたいと思えます。大体1時間ぐらい時間をとっておりますので、御自由に御発言いただければと思えます。それから私は冒頭申し上げましたように、かなり事務局に申し上げて反映をさせていただいておりますので、それらを含めまして御意見を頂ければと思えます。

それでは、どなたからでも結構でございますので、御意見ございましたらお願いいたします。いかがでしょうか。

お願いします、田中さん。

【田中委員】 どうもありがとうございました。この中間まとめ（案）の中に私が前に申し上げたことは相当取り入れていただいているので大変結構だと思えますが、少し付け加えると前、申し上げてないことでいうと、中間まとめ（案）で8のところ、キャンパス内で日本人学生が外国人留学生とともに学び、生活する機会を得て、留学意欲を喚起されるという好循環をつくることであるというのは、これは外に出てってもらうことと同時に、日本の大学のキャンパス自体をよりグローバルにすることによって、さらに外に出ていくという、そういうプロセスを増す意味で本当に大事だと思うんですね。

ただ、その中で、やや具体的なことで私がこれまでもやってきて思ったことですが、日本の大学でも留学生を積極的に受け入れている大学が非常に増えており、特に英語だけで学位の取れるプログラムを作っている大学もかなり増えてきていると思うんですね。ただ、そこで問題は、英語だけで学位の取れるプログラムに参加するのは留学生で、日本人の学生はそれにあまり参加しないということで、日本の大学のグローバル化、進めると言いながら、大学のキャンパスの中で留学生コミュニティーと日本人コミュニティーが実際そんなに密接に関連しないという、留学生自体が何か日本の大学の中の留学生の島みたいになっちゃっている傾向が、どのぐらいといたら分からないけど、かなり見られるんじゃないかということですね。

それで私の経験でいうと、英語プログラムに留学生が出ているんだけど、英語プログラムには日本人の学生はあまり出ない。何で出ないかという、そのプログラムに出ると成績が悪くなっちゃうとか。だから何というんでしょうかね、もうちょっと大学それぞれで工夫していただいて、せっかく来ている留学生と学業において、何ていうんでしょう

か、部活とか、いろんなことをやれば大体仲よくなるんですけど、それは大事なんだけど、そうじゃなくて授業の中で実際に日本人と留学生と一緒に授業に出られるような工夫、あるいは出なきゃいけないような工夫、何というんでしょうか、英語で実質科目をやるような授業を日本人の学生に対しても必修化するようなことを少し考えていただくと必要なんじゃないかなと思っておる次第で、ですから、このところを相当、各大学に工夫していただくことが大事だと思います。

それからもう一つは、もっと前の段階の海外経験というのは非常に重要で、この11のところ例えば幼稚園から高等学校までの教育現場において、国内大学等に在籍する外国人留学生と接する機会を設ける等が推奨されるといって、これは私もそのとおりだと思っておりますが、より具体的に言うと、それぞれの地方自治体が海外との姉妹都市提携とか結んでいるようなことも利用していただくことも一つですし、それから、何ていうんでしょうか、日本とアフリカの開発会議ってTICADというのをこの頃やって、割と横浜市はTICADをホストするというので、そうするとアフリカ54か国のそれぞれの国を、何ていうんですかね、それぞれの地域の小学校でそれぞれの国を結びつけて、その国のことを理解してもらうようなことをやっているようですけども、そういうような地方自治体の取組も応援していかなくちゃいけない。

それからもう一つは、JICAが事務をやっておる青年海外協力隊というのがあって、これ、小中の先生も出てってもらっているし、それから学校の先生でない人で協力隊に行ってもらっている人がいて、こういう人たちに割といろんな小中高で出前の授業とか、経験とかをやってもらっているんですけども、この辺も積極的に進めてもらうことが外国への、何ていうんですか、関心を持つのに重要だと思います。

あともう一つは、海外協力隊は日本人で行った人たちが帰ってきたんですけど、あと、かなりの数、日本の地方自治体等で活躍していただいているのがJETプログラムで来ていただいている外国の先生方なので、このJETプログラムもできる限り、さらに小中高の皆さんが世界に目を見開く意味で、さらに活用をすることをお願いできたらいいなと思っておるところであります。

以上であります。

【小路座長】 ありがとうございます。4点頂戴しまして、冒頭申し上げなかったんですけども、頂いた御意見をどういうふうに記載するか、それから今、おっしゃっていただいたのは現地の運用部分にかなり関わる部分でありまして、運用部分で工夫を加えてい

くようにするのかどうか。その辺は後ほど私どもにお任せいただければと思いますので、忌憚ない御意見を今後も出していただければと思います。4点承りました。ありがとうございました。

それでは、ほかの方はいかがでしょうか。廣津留さん。

【廣津留委員】 廣津留です。今の田中さんの意見に一つ付け加えといいますか、私は10年間ほど、12年に今年なるんですけれども、Summer in JAPANという英語プログラムを自分の故郷である大分でやっております、ちょうど、この8月頭に終わったところなんですけれども、ハーバード大学、自分が行ったところから10名ほど大学生を連れてきて小中高生にワークショップを英語で教えるプログラムですけれども、教育未来創造会議では御説明をさせていただいたんですけれども、そこで毎年いろいろな現地の大学の学生たちにTAをしてもらってますけれども、今年は私が教えている国際教養大学AIU、秋田の大学の生徒を数名募集しまして、そこでTAとしてハーバード生のサポートをしてもらいました。

AIUはもう完全に英語のキャンパスなので、全くもう日本語で行う授業がなく完全な留学生と日本人が同じ現場で授業を受けている、もうほかに選択肢はないというところなので、今年、ほかの大学の学生のTAさんとAIUの学生TAさんを一緒に交ぜてみて気がついたんですけれども、AIUの方はもう常に授業で普通に存在している存在として留学生と関わっているのもあって、もう全く何ていうか、自分を控え目にすることもなく、同じくらいの対等の立場で意見も言えますし、教育のコンテンツも一緒に考えてくれるというところでもかなり差が出るなと思いました。

なので、これが本当に留学生向けの例えば英語のプログラムをつくるのと、英語だけでやる授業で差が出るのかということがあると思いますけれども、これは本当に実際に私が今月すごく分かったところでしたので、すごく賛成というか、同感でした。

それと関連するところもあるんですけれども、最後の11番の留学の機運醸成のところ、これはここで変えてほしいというよりも感想というか、意見ですが、幼児期も含め、早期から外国人と接する機会があることが望ましいとあるんですけれども、外国人というワードを使うのはどうかということ、もう完全に使わないわけにはいかないと思いますので。例えば外国人留学生とか、外国人コミュニティーとかというワードにした場合は全く違和感がないんですけれども、外国と接する、外国人と接するのがもう令和感がないかなと思ひまして。

つまり、AIUの学生たちと私が日頃、触れていて思うのは、完全に日本人と外国人という

区別が全くなく過ごしている学生たちであって、そこが海外に出たときに自分の出し方と
かに関係があるところなので、これが、ここで外国人と使わないんだったらどうなるんだ
という議論をし始めたら、もう日が暮れると思いますので、そこはないんですけども、
日本人にもいろいろな方がいますし、外国人にもいろいろな方がいるのは私たちは分かっ
ていると思いますけれども。

ただ、公式文書にこれ、書いたときに、例えば、じゃ、英語に訳して海外にこれを発信
するってなったときに、外国人と接するってforeignerって書くのか、何かcommunicate
with foreignerとか書くと、日本はいまだにそういうところにいるのかという印象にもな
りますし、この考え方を、もう既に変えないといけないのかなというのを、ここの最後の
部分を読んで思ったというのが率直な感想です。これをそのまま生かすかどうかは、もち
ろんお任せしますが、これからの考え方として一つ思ったので述べさせていただきました。

以上です。

【小路座長】 ありがとうございます。もうちょっと詳しく聞きたいんですけども、
11番の中身そのものについては、廣津留さんとしてはどういう趣旨をキーポイントにされ
たらという御指摘ですか、一つは。

【廣津留委員】 それでいきますと、11番はまず目的語がないかなと思まして。この
文化の壁を作らず、何に親しんでいくのかというところが抜けているなというのが、まず
1つ目に思まして。ここの主語が例えば留学することに親しむなのか、海外渡航への抵抗
をなくすためにはなのか、海外へ飛び出す意欲を増すためにはなのか、まず、ここの最初
のキーワードがここになかったのも、それこそ皆様の御意向がどこだったのかなというの
は一つ思ったんですけども。

私がここで一番思うのは、外国人というよりも本当にいろいろなバックグラウンドとい
うか。英語に訳したときに、People with different backgroundとか、with different
nationalityとかfaceとか、そういうことになると思うんですけど、それはもう日本語の場
合は、それは1個に外国人としてまとめてしまっていると思うんですけど、それは多様な
人々、多様なバックグラウンドを持つ人々という意味を、これを外国人として大丈夫なの
かなというところですよ。

【正宗委員】 ということは多国籍とか、そういった表現のほうがいいですかね。

【廣津留委員】 そうですね。とか、日本人であっても外国語を使う人もいますし、そ
ういう面で、わざわざ外国人って言わなくてもいいのかなというのがポイントですけど、

すいません、説明が難しくて。

【小路座長】 何となく趣旨は分かりました。ここは事務局で後ほど説明していただきたいと思いますが、日本人、中には日本人学生って書いてあるんですけど、主語は日本人が文化の壁をつくらずに親しんでいくと読み取っていただくことが必要なのかなど。それで幼児期も含め早期から、これは外国人なのか、多国籍、まあ、多国籍の外国人も一緒だと思うんですけど。

【廣津留委員】 そうですね、同じこと。

【小路座長】 日本人以外ということで記載をしているということですね。日本人同士というのは普通にお付き合いがありますので、留学が主でありますので、日本に住む幼児期から早期に日本人以外の国籍のある人たちと接する機会をつくっていくことが望ましいと趣旨は記載をしていると思うんですけど、そこが少し何か。

はい、田中さん。

すいません、私こだわっているわけではなく、理解を深めようと思って伺っているだけで。

【田中委員】 私も外国人日本人という言葉あまり使い過ぎるのはよろしくない。なので、ここの趣旨は、私の理解は世界が多様であるということ早くから認識させることのために、かくかく、しかじかをすべきであるという趣旨にさせていただけるとありがたいと思いますね。日本人といっても外国にルーツを持ったり、外国で様々な経験をした日本人はいっぱいいるわけで、みんな日本人が一色ってわけでもないんだと思います。

ですから、ここのところの趣旨は、どちらかという私は世界が非常に多様な場所であって、いろいろな面白いことに満ちているようなことに小さい頃から理解を深めていただくと、そのためには外国人留学生と会ってみたり、外国にルーツを持つ日本人のこともよく分かってみたりとか、いろいろな手段あると思うんですけども、目的自体は日本人と外国人が分かれてて、日本人が外国人と親しくならなきゃ駄目だという、そういうふうな持っていくのではないほうがいいんじゃないかなと思います。

【小路座長】 伊藤先生。

【伊藤委員】 私がバークレーで大学院をしているときに、カトリックの教会でホームレスのためにクリスマスパーティーをやろうとしたときに、クリスマスというのはクリスマスだけ相手だから違う名前に名前したほうがいいんじゃないかって、さんざんもめたことを随分、懐かしく思い出したけれども、要は日本で生まれ、日本で育った人たちが多

様な文化に小さいときから触れる機会が必要だということなんだと私は思いました。

ですから人種とかそういうことより、基本的には多分日本で生まれ育って日本の学校に行っている人たちが多様な人たちに触れるというのが方向性かなと思いますが、いかがでしょうか。

【小路座長】 廣津留さん、それから田中さん、それから伊藤先生、うまくまとめていただいて、私も十分理解が深まりましたので。正宗さん、どうぞ。

【正宗委員】 外国人の観点から申し上げますと、おっしゃることはすごくよく分かるんですけども、30年、日本に住んでおまして、結局、日本人の頭の中では、これはもう日本人と外国人って物すごくはっきり分かれているわけですよ。これは、そんなに簡単になくなるものではないと思いますし、もちろん、いろんな表現の使い方はあるかと思うんですけど、外国人という言葉にこだわるよりは外国人をより受け入れるような、まずは第一歩として、それを目指すべきだと思います。そしてどんどん、どんどん、外国人を受け入れていく中では、いろんな人種の方々はいらるなというのが、気づきは生まれてくると思います。

この議論がなされている間に私は思い出しましたが、初めて日本に来たときに、1980年ですけども、成田空港に着いたところでは日本人って書いてありまして、あと皆さん、御存じかと思いますがグリーンで英語でエイリアンって書いてありますから、私たち外国人が宇宙から来たのかと思わせるような時代ではありました。そのようなスタート時点からそれ以降はもうものすごく進歩がありますので、あまり外国人という言葉に気を遣わずに、と個人的には思います。

【小路座長】 ありがとうございます。私も事務局も4名の方の御発言の趣旨、ある程度、理解ができましたので、ここについてはこれで打ち切らせていただいて御意見を承るということとさせていただきます。ありがとうございます。

それでは次に、先ほどからお待ちいただいています南場さん、よろしくお願いいたします。ありがとうございます。

【南場委員】 丁寧な修正をありがとうございます。私が申し上げたポイントで研究者については言及がないのですが、これは今回の会議の範囲を留学に絞っているため記載がないということだと思いますので、そこについては、また別の場で訴えていくことにしたいと思います。

あと、ほかに3つ申し上げたいことがあります。一つは3ページですけども、依然とし

て民間企業・団体等からの支援は引き続き継続、拡充すべきという書き方になっていますが、前から申し上げているとおり、企業にとって社会貢献活動は例えば環境保護や文化振興、あるいはDeNAの場合はプログラミング教育やITの利用に関する教育や、スポーツに絞ってやっています。どういう活動を支援するかというのは民間の自由である以上、この「べき」という言葉は強すぎると思います。

民間の支援が、さきほどのお話にもありますように、コロナであったり利益が出なくなったりして続かなくなる場合もあります。そういった自由意思によって行われるものに頼っているのはサステナブルな仕組みになりません。私も当然そういった民間の支援があったほうが良いと思うのですけれども、ここは「民間企業・団体等からの支援は引き続き継続、拡充されることが望ましい。」として、「そのために、政府は」と主語の政府を明記して、「税制等、企業を支援しやすい仕組みを検討すべきである」としていただきたいと思います。

サステナブルではないということに加えて、どの立場で民間企業にこれを言うのかということも非常に気になります。私は留学が大事だと思っているから、この会にも率先して参加させていただいているんですが、民間の経営者として常に思うのは、民間企業は自由意思でしっかりとそれぞれのガバナンスに応じて経営されるべきであります。ただ、社会としては民間企業・団体等が引き続き支援を継続したり、拡充することは望ましいので、それが促されるような制度をつくるのが政府の仕事であることを書くべきであると思います。

2点目です。さきほど御紹介いただいたとおり学部生の学位取得も非常に有効です。最も吸収力のある18歳から22歳のタイミングで、欧米のよい教育機関で勉強し、スケールが全く違う人材に育つということがあると思います。この文章では、学部生等については学位が否定されているわけではないですが明記がなく、大学院生についてのみ学位取得が明記されているため、学部生等の学位取得のサポートが薄まってしまいますので、ぜひ、学部生等のところにも学位取得の目的も支援することを明記いただきたいと思います。

それから3番目として、特にこちらの提言に入れ込んでいただきたいということではないのですが、ぜひ、この場でお伝えしたいことがあります。5ページ10番に、「周囲と同じレールから外れることへの恐怖が依然として根強いと言われる日本にあって」とあり、そのために企業もこうしたほうが良いと書いてあることには賛成ですけれども、周囲と同じレールから外れることへの恐怖が強い人材を育てていることこそが日本の教育の最大の問

題であると思います。そこについては、文科省の方々はこちらにいらっしゃるので直接お伝えしたいと思います。

私は、週に1回はアメリカの大学生と話すようにしています。ヨーロッパやアジアの学生もその中に入ることがありますけれども、多いときは週に3回、時々高校生も入ります。教育に関心があるので、個人としてそのような活動をしているのですが、日本の就活生と比べて圧倒的に周りに流されずに自分をよく見詰め直して、じっくり自分の意思決定をするというマチュリティが高いです。

進路を選択するために、まだ自分は自分が何をしたいか、どういう人間になりたいのか決めることができないならば、自分の意思で1年ギャップイヤーを設けて、様々な経験を積むようなことを行っている。大学進学の前に同様のことをする高校生もいます。

ここは本質的な課題です。周囲が何を考えているのか、何を正解としているのか、ということに非常に重きを置く日本の教育で育った人は世界のリーダーにはなりにくいし、イノベーションを生み出すことにつながりません。留学の問題を超えて本質的な問題として、ぜひ文科省として取り組んでいただきたいと思います。

以上です。

【小路座長】 ありがとうございます。3点御指摘いただきまして、1点目、2点目については中身に盛り込むという御要請かと思います。3点目については、まさに日本の教育問題、これも南場さん、一貫して御指摘されていることと思いますので、これは文科省でお聞きして南場さんの御意向に沿って、教育問題という中で検討なり、考えていくと受け取らせていただければと思います。そんなところでよろしゅうございますか。1点目につきましては、そういう方向に沿って検討させていただきます。

【南場委員】 ありがとうございます。

【小路座長】 ありがとうございます。それでは、次にPezzottiさん、お願いいたします。

【Pezzotti委員】 ありがとうございます。いろいろ面白い議論はありましてエンjoyしていますけれども、内容について報告書には主には問題ないと思っているんですけれども、ただ、3点について少し意見を出させてください。御意見を聞かせてください。

まずね、日本の教育システムの中には、どういうパラメーターで人を上にも、要するに上から下まで順番を決めるということは、もう定まっている状況の中で、学習考査はかなり複雑なパラメーターで測るべきであるんですけれども、日本では入学試験も含めて決ま

っているパターンの学習考査の人間は上として決めていくということが見えるんですね。

要するに、IQ高いかもしれませんが、ほかのパラメーターが含まれているかどうかということは、先ほども自分の位置づけは、よく外国人が分かっているということはおっしゃっていましたが、自分が上に上がるために求められている行動、社会が求めるような発想が、ただエクセルファイルは早く読める、反対側で言えるという、そういう学習考査だけではない、そういう自分のことを説明できるようになっていく。したがって、この教育システムのセレクションというパラメーターを変えない限り、その後は海外に行かせて、マジックで戻ってきて、違う形になってきたという、そういう成果は、奇跡的に変わるということは難しいということは理解してほしい。

要するに小さいときからジャッジメントされているパラメーター、発想、そういうものを直していかないといけないところで、これはぜひ文科省、考えてもらいたいところですが、今、入学試験のパラメーター、やり方はものすごく定まっています、きっちりしているわけですから、その最後に、あなたはリーダーシップ出せ、オリジナリティ出せということを言われて、いきなりできるわけじゃないという、子供のときからそういう考え方は育っていかなくちゃいけないということは御理解いただきたい。

今一番クラス内の賢い人が、要するに細かいことが覚えられるという人間ですけれども、ほかのパラメーターで例えば自己紹介するときに、どれだけ皆さんには自分のインパクトを高くさせるということは教えられていない。そういう人材は上とは思われないというパラメーターで評価されているから、最後、最終的にそういうタイプの一番上のタイプは、そういうエンパティックじゃない状況になってしまって仕方がないということは御理解していただきたいということが一つですね。

だから、できたら人材評価の考え方、もう大学システム、教育システム全体、大学前からでも違うパラメーター入れていただくと、口頭試験するとか、自分についてフリーの内容のテーマを書かせるとか、定まった内容だけで評価することはやめてもらわない限り、いつまでも最後にワントypesのものすごい均一化した人材しか集まらないことは理解していただきたいところです。

もう一つ、内容が違うんですけれども留学成果についてお話、その後、報告して、皆さんに自分が説明するように報告書には書いているんですけれども、私は成果だけじゃなくて成果物というものは何であるかということは、留学する前からはっきりさせなければならぬ。要するに海外旅行と留学という違いはどこにあるかということをはっきりさせな

いといけない、要するに何か持って帰らないといけないと。ディプロマであろうが、試験を通ったであろうが、何かものがないと、行って楽しんで、ああ、外国人が違う暮らししてるなということに戻ってきて、これは支援するべきではない内容であるということは理解してもらいたいということは思います。

要するに行くだけではものが足りない、何か持って帰るものが何ということだね。あなた、そこ行って例えばどこかの学校に通う、あるいはダブルディグリーする、あるいは何か試験する、何か持って帰って成果物がはっきりさせるべきではないかということは私は思います。したがって、そこはそれに向かって一生懸命ものを持って帰らないといけない、成果物、持って帰らないといけないということは、リラックスできるような状況ではないほうがいいと私は思います。

3つ目ですけれども、外国人対日本人というストーリーが、私も38年ずっと見ているものですけれども、昔と比べたら今、もうほとんど、そういうストーリーが消えているんじゃないかと思っているんですけれども、エイリアン、どこにも書いてないということはありませんし、日本は大きな進歩をしていることは間違いないと私は思っているんですけれども。

ただ、私は一番最初はものすごい苦しい時代を覚えているんですけれども、読めない、しゃべれない、何も分からないということで、いらいらするということは外国人はみんなあるはずですけれども、ただ、私にはすごい大事な言葉、言っていた方がいいんじゃないかと思ってね。彼が言ってくれたのは、あなたは、日本人の考え方は理解するのは大切であって同意する必要はないということをおっしゃったんですね。要するに理解することと同意することは違うよということで、要するに、あなたと同じ考え方、持っていない人間に対して、あなたはその存在を認めて、同意しなくても一緒に暮らせるような人材になりなさいということをおっしゃって、私はそういう言葉は自分の将来が決まったということは今でも思っているわけですね。

要するに日本に来て自分の価値観はどうしても諦めたくない、それと日本人には自分の価値観を決めつけようとする外国人はアウトですよ。だから、そういう人に対して日本人は反発するというのは当たり前のことであって、私は逆に入れましょうという、みんな同じにしましょうという、そういう考え方はどうしても理解できない。要するに、ここには日本である限り日本の考え方、在り方、非常に均一なものがあるということで、素晴らしい部分もあって、都合悪いこともあるんですけれども、外国人はここに来て日本人を変え

るという考え方はまずないということは理解させなければならない。

そういう人材が来れば来るほど日本はオープンになって、本当にそういうオープン社会になっていくわけですが、ここに来て自分の価値観は日本人に決めつけようと思っ
ている外国人に対して、私は帰っていただいても問題ないということを考えております。

極端なことを言いましたが、お許しいただければと思いますが、長い間でいろんなケー
スは見ていますけれども、要するに自分が上であるということは、決めつけに来る外国人
は、私は日本に残るべきではないということは考えております。

以上です。

【小路座長】 ありがとうございます。大変参考になりました。別に極端な意見とい
うことではないとお聞きさせていただきました。

コメントすると、1点目はそれぞれの大学で持っておられるアドミッション、それからデ
ィプロマ、カリキュラムのポリシー、この3つのポリシーにも関わることなのかなと承りま
した。それから2つ目は、ずっとこれはもう皆さん、共通でおっしゃっていただいている留
学するときの目的ですね。目的意識なり、目的。それに照らして留学が終わった後に、そ
の目的がどの程度、達成したのか、あるいは留学中に当初の目的とは違う成果物を得るこ
とも往々にしてあろうかと思うんですね。そういったものも含めまして、どういったもの
を留学後に自分が得たのかということを、何らかの形で表明していくことが大事なのかな
と思います。

3点目については派遣とか受入れ、双方積極的にやっていくということによって、おっし
やる御指摘も改善されていくのかなと承りました。貴重な御意見として承っていきたく
思います。ありがとうございます。

それでは次、吉岡さん、手を挙げていらっしゃいますので吉岡さん、どうぞ。

【吉岡委員】 ありがとうございます。よろしくお願ひします。この中間まとめ、大変
コンパクトにまとまっていますし、量的にも、これだとみんな、読もうと思うというこ
も含めてよくできているなというのが第1印象です。

これ、中間まとめですので、今後議論をしていかなければならない問題点というのはあ
ると思いますし、先ほど最初るときに問題になった、例えば日本人といったときに何を指
しているのかという、結構本質的な問題もありますけれども、そういうことも含めて、こ
れはこれで全体としていいのかなと思いました。

1点だけ、この段階で変えなくてもいいんですが、前にも発言して書き込んでいただい

いるんですけれども、大学の国際化にとって非常に重要なのは国際的業務を担える職員の養成ということです。この中に1回だけ、5ページのところに体制・環境整備のところの7の最後のところに「加えて」という形で書き込んでいただいている、これ、明確に書き込んでいただいているんですけれども、ある意味では個人的には重要度としては職員の養成、ほとんどトップに近いことかなと思っておりますので、可能であれば、この段階で、あるいは次の報告書の段階でもう少し強調できないかなと思いました。

その問題は先ほど田中委員がおっしゃっていた、例えば地方自治体であるとかということの国際化と、実は地方にある大学といいますか、大学が地方にある、地方というか、どこかそういう自治体等との連携のときに、自治体やなんかの職員がある程度、国際的な対応ができる人が増えていかないと実際にはできないということでもあります。

それから、これは受入れの問題に関わるのかもしれませんが、本来のA0入試ですよ。入試を変えていくときに外国人を受け入れるとか、そういう対応ができる人材を日本の中で大学に入れるときの受入れのシステムをつくる場合、それは本来のA0入試を組み立てていくために職員の能力を高めないとできないので、もう入試を教員に任せている時代では明らかでないので、そういう意味では職員の養成、とりわけ国際的なレベルの職員の養成ということをもうちょっと強調していただいてもいいかなと思いました。その1点です。ありがとうございました。

【小路座長】 ありがとうございます。強調点、細かくは2つ頂戴したと思いますので反映できるように検討させていただきたいと思います。よろしゅうございますか。

それでは、ほかの委員の方、伊藤さん、お願いいたします。

【伊藤委員】 中間まとめの今、案に関して2点、まず大きなことを申し上げたいと思います。まずは、2つあるんです、一つは先ほどの南場委員の話にも近いんですけれども、2ページの経済的支援というところで、実は国とか政府がお金をもっと増やすという主語がないんですね。ですので、最後のところの民間団体も巻き込んだという、そこだけ主語が出てくるのが私もすごく違和感を感じました。

小中高大教育、高等教育、そして留学、こういった国の将来をどうするかというのは、もうあくまでも日本の税金を納めている人たちが、どういうふうにかこの日本という将来をつくっていききたいかということの投資ですので、その投資というのは国が行うべきだというのは私が一番感じていることですので、実際に今回、資料3でもうしっかりとしたデータが出ているので、これをどこまで増やしていくのかということが私たちにとってはここの

議論の大きなポイントなのであると思うので、まず、そのところの国のコミットメントということ、国民の議論を喚起して行っていきたいと思うところが1点。

それからもう一つ、今回はまだこれでいいかと思うんですけども、デジタル化ということが全くの影響というか、利用というのが全く触れられていないんですね。例えば南場委員が海外の学位を取りに行く人たちを支援するとおっしゃったときに、実はもう少しの将来ではマイナンバーカードを持っていて、マイナンバーカードによって例えば吉岡さん、いらっしゃいますけど、日本学生支援機構だけは、これから大学に進む、または今、大学生の家庭の経済状況というのがマイナンバーカードで、ある個人情報保護のもとで見る権利があって、見る権限があり、それによりプッシュ型であなたの次女が大学に行くときには毎年50万円の補助がもらえますとか、あなたの三男が留学をする場合、アメリカ、または世界で学部学位取得を目指して留学する場合には、かくかく、しかじかの援助、具体的な数字が出ていけばそれに越したことはないんですけど、もらうことができますといったようなことがプッシュ型で国から来ると、あなたがこの夏、留学する、あなたが留学するとこれだけの補助が得られますというものが来ると、それはもう本当の意味での留学支援ということになると思うので。

あらゆる意味で国の将来を投資して変えていくときには、マイナンバーカードを正しく使うということで、そういうプッシュ型というのをやるべきなのではないかと思っているわけでありまして。何かマイナンバーカードという自分が監視されると思うんですけど、そうじゃなくて、将来、もう年金もあなた、これだけもらえます、何も申請しなくてももらえるような形に持っていくと初めてサービスとして正しいものになるので、できればそういうような方向性を考えてもらうほうがいいと思います。

また、デジタル化を使えば今、私たちが日本語で話しているようなことも当たり前のようにここに日本語字幕も出ますし、それ以外の言葉にもしっかりと翻訳されるので、そうすれば先ほど田中委員がおっしゃっていたような留学生を受け入れる、日本語がそれほど得意じゃない人を受け入れても、それはもう今のテクノロジーを使えば、それがあつという間に理解ができるところにリアルタイムで持って行って、逆に質問があるときにもすぐ自分の言葉で入力すれば、それが日本語になって出てきて、それをクラス内で手を挙げて、それを発音すればいいと。

今、漢字も書き取りの勉強しなくても、もう変換で漢字というものは書けるようになっている、メールも書けるようになっているわけですから、そういったようなことをもつと

活用して、双方向でデジタル化が進んでいる日本だから留学がしやすいといったことを本来ならば進めていくべきなんじゃないかと私は思っていますので、これはまだ中間取りまとめですので将来的にはそういったことを考えてもらいたいと思っていました。

以上です。

【小路座長】 ありがとうございます。経済支援につきましては南場さんと御指摘、同じかと承りました。まずは、国のコミットメントを第一優先と、それから民間企業については、すべきということから拡充というようなトーンにというような同じ御指摘かと思えます。それからデジタル化については承りましたので、検討させていただければと思います。

まだたくさんの方がお手を挙げていますので、まず正宗さん、どうぞ。

【正宗委員】 ありがとうございます。先ほどの伊藤委員の御意見と似たような意見でございますが、実は週末に静岡で別な会議、御一緒させていただきまして御講義もお伺いしましたけれども、そこで会議のテーマというのは日本の未来をデザインするというテーマだったんですね。こちらの一番トップの最初の出だしを見ますと、日本の未来を創造する若者を出して、育成していくような環境をとということですけれども、本当に考えますと、日本の社会を大きなレベルで変えられるような思想家も必要なのではないかと思います。

今はもう少子化問題であるとか環境問題、技術の変化であるとか、様々な問題を抱えている中で、社会を大きなレベルで考えられる人材を育成しないといけない時代だと思えます。

そうしますと、みんなに同じような支援を出す、みんなに同じような機会を提供するというのが、それはあるレベルでは、この中間層では必要かと思えますが、エリート教育のレーンというのも設けるべきなのではないかと思ひまして、そういった、エリート教育のレーンに乗り出していける人材をいかにうまくピックアップして、先ほどのPezzotti先生の御意見と同じですけれども、帰ってくると何をしてくれるんですかということで、社会に大きな未来デザインをしてくれるような人材を育成するならば、そういったエリート教育が必要なのではないかと存じます。それは私の意見として、今のところで中間報告のまとめはこれで結構ですが、追加は1点としてこれを申し上げたいです。

【小路座長】 ありがとうございます。御意見として承らせていただくということによるしゅうございますか。ありがとうございます。

それでは、次に前川さん、御発言お願いいたします。

【前川委員】 丁寧にもまとめていただいております。今日、先ほどから様々な委員の御意見をお聞きしております、小中高校段階での教育課題をずばっと御指摘いただいているということで、携わっている者として襟を正すといえますか、反省もしているところです。

頂いた御意見で言いますと、海外留学は何のためにするかということだと思いますと、この国の将来を考えたときに、グローバルな人材をしっかりと育成していくために海外留学の経験を多くさせたいということですから、その観点で言いますとグローバルな人材とはどういう人なのかということで、先ほどから様々な貴重な御意見を頂いていると思うんです。例えば意思決定を自分でできる、意見をしっかりと表明できる、その上で様々な人たちと共生し、ともにつくる、共創する、そういう人材を育成していくことが留学の前段階として教育界に求められていると受け取らせていただきました。

中間まとめに入れていただくかどうかは別として、例えば今、文部科学省で学習指導要領の改訂が改めて進められようとしておりますし、様々なところで教育界として、これ、しっかり受け止めていかなければならないなと思っています。もし可能でしたら例えば前文でありますとか、あるいは最後の留学の機運醸成の11番のような形で、教育の方向性としてこういうものが必要だということを入れていただくのも一つの方法かなと思います。

それと、もう一つは経済的支援の4番、先ほどから意見が出ておりますけれども、トビタテ！留学JAPANをはじめとする民間企業・団体等からの支援は引き続き継続、拡充すべきであるという、この文言ですが、本来意図されているのは継続、拡充してもらえるような努力、工夫をすべきであるということではないかなと思っています。その一つが税制の問題であったり、もう一つは例えば今日、ダイキン工業様から非常に貴重な御発表をお聞かせいただいたんですが、企業様がそれなら支援してもいいなと思えるようなプログラムを工夫する、創造していく、こういうことも含めて民間企業・団体等からの支援を拡充する努力をすべきであるというニュアンスなのかなと受け取らせていただきました。

以上です。

【小路座長】 ありがとうございます。民間企業からの経済支援については、南場さんはじめ、ほかの委員の方と今の前川さんのおっしゃったこと、同じ趣旨の御意見と受け止めさせていただきました。そういった趣旨に内容と記載、変えていくべきかなと私も感じております。

それから教育の方向性についても少し盛り込むことについても検討させていただければ

と、これも南場さんから同じような御指摘をいただいておりますので、こちらで承らせていただきたいと思います。

それでは前川さん、それでよろしいでしょうか。

【前川委員】 結構です。ありがとうございます。

【小路座長】 ありがとうございます。

それでは大槻さん、どうぞ。

【大槻委員】 ありがとうございます。多分時間がないので簡潔にお話しさせていただくと、すごいグローバルな人材とか、もちろん、そういう人たちを増やすことがすごい大事なのは間違いなくて、それはそのままいいかなと思うんですけども、自分自身は日本の何か結構、教育を受けてきた中であまり感じられなかった海外に行ったことで日本の良さだとか、いいところも含めて悪いところも含めて、自国についてすごく知る機会だったということに対して意欲を持てた。そこから日本をこういう国にしたいだったりとか、自分の強みも日本人として生まれてきているところもあるので、そこを含めて自分の強みだったり、さっきから教育の問題でも話されている、そういうふうにルールを持ってしまいうんだなということも含めて、海外に行くからこそ理解していけるようになって、日本のことの課題だったりとかを考えられるかなと思っていて。

何かグローバルに輝く人材を生かすというところにプラスして、私としては国に、日本に対してもこういうふうな何か、こう貢献したいとか、そういう意思が持てるということも、何だろう、留学のよさであり、そこでかけるべき今後、お金だとか、そういう民間の話でもそうだと思うんですけども、仕組みをつくって、そういう機会をつくっていくようなことをする理由としては、グローバルな人材ってだけではなくて、そういう日本のために日本がどうしたいかという人の意思を持てる人が増えるところも、何かいいんじゃないかなと思っていて、そういうところも一番初めに留学の意義みたいなことを書いてあると思うんですけども、もうちょっとそういうところを足してもいいんじゃないかなと感じました。

以上です。

【小路座長】 ありがとうございます。大槻さんの意見も同感でございますので、承らせていただきたいと思います。

最後でお願いしたいと思います。日色さん。

【日色委員】 私もクイックに。5ページ目の10番の留学の機運醸成ですけども、これ

までの議論では割と保護者の方の影響というのを相当議論されていたと思うんですけども、この報告書だと保護者等って書いてあるだけで少し薄いかなという気もしました。特に高校生は費用の問題とか留学のメリット、そして安全安心に行けるのかという、そこがバリアになっていると思うので、そこをどうやってしっかりと克服していくかというところの書きぶりが薄いかなと思うので、そこは考えていただきたいと思います。

以前、私、費用を負担できる家庭では、留学費用については所得控除のような形も考えてはいかがでしょうかと申し上げたんですけども、ふるさと納税等の活用というのは書いてあるんですが、親の不安感、費用面での懸念を取り除く意味では、そういった家庭の税制上の手当があってもいいんじゃないかなと、改めてここで少し意見させていただきま

す。

【小路座長】 ありがとうございます。それでは、大変多くの方から有益な御意見を頂戴しました。御指摘もいただきました。私、座長としても当然のことながら頂いた御意見、全く異論ございません。事務局と一緒に反映するようにさせていただければと思います。

事務局から、保坂さんから一言、お話をお願いいたします。

【保坂留学生交流室長】 事務局でございます。本日も様々な御意見頂戴しまして誠にありがとうございました。頂いた御意見をよく整理しまして、反映の仕方につきましては座長とよく御相談させていただきたいと思います。

特に、この中間まとめの全体に関わるものであるとか、広く複数の委員から頂いたようなところについて幾つかあると思っております。この中間まとめで政府というような文言がないということで、これについては、主な目当てがまず政府だろうという、そういうようなこともございまして、わざわざたくさん書いていないというところはございますが、御意見を踏まえて、またどういった工夫ができるかとよく考えてまいりたいと思います。

また、Pezzotti委員から頂きました留学に当たって明確な成果物というところ、確かに大学の学部段階や大学院での学位取得、そういった方については確かにそうかなというところ、もう一方で御議論を通じまして、これから志を宿す、意思を宿すという方についても広く支援をとるところもございまして、こういったところのバランス踏まえてどういうふうにするかと、難しいところではございますが考えさせていただければと思っております。

一番複数の委員から御意見を頂きました11番の部分、外国人と接する機会というところだと思います。もともと機運醸成という大きな節にございますので、機運醸成に向けてということではありますけれども、この外国人と接する機会というのを、先ほどこの議論の中で田中委員の御発言がヒントになるのかなと思っていますが、多様な文化の理解とか、多様性の理解とか、そういったような、どういう趣旨の機会があるかというのが望ましい、あるいは、その具体的方法として例えば下段にありますような外国人留学生との接する機会というような、そういうような形で例えば修正するようなことが考えられるかなと思いますが、具体的方法については、また御相談を座長ともさせていただきたいと思っております。いろいろと御意見頂戴しましてありがとうございます。

【小路座長】 ありがとうございます。事務局からほかにもございますか。よろしいでしょうか。

佐藤さん、どうぞ。

【佐藤参事官】 担当課長として一言だけ、では申し上げたいと思っております。これまで中間まとめというところで、ここまで皆様、お忙しい中、御議論いただきましてありがとうございます。

前文のところに書いているように、共生社会に向けて、この日本というのが進んでいかなければいけない方向性は、ここはもう確実なものだと思っています。一方で、今日もいろいろ御指摘やお話があったように外国人というものの意識ですとか、大学の現場でも留学生が来ているけれど日本人となかなか実はあまり一緒に学んでない実態があるんじゃないかとか、もろもろあったと思うんですけども、こういうのを全て、まさに共生社会というところに向けての大きな課題だと思っておりますので、頂戴いた御意見、一つは成果としては中間の取りまとめ(案)、もう一つは資料3のこの図にありますように、いろいろ、こうあるべき、あああるべきというのはあるんですけど、段階でしっかりと整理してこれたのが一つの成果だと思っておりますので、また引き続き後半戦、いろいろ座長とも御相談させていただきながら、委員の皆様から御意見頂いていきたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。ありがとうございます。

【小路座長】 よろしいでしょうか。ありがとうございます。

それでは、本日も大変有益な御指摘を様々な経験から頂いて、私自身も大変勉強になりました。本日頂いた内容を踏まえまして、中間まとめ(案)として取りまとめで、最終にしていきたいと思っております。最終の内容のまとめにつきましては大変僭越ですが事務局と打合せ

まして、今日の意見を踏まえまして座長に一任いただくということで御了解をいただきましたと思いますけれども、よろしゅうございますか。

(「異議なし」の声あり)

【小路座長】 すいません、何か強制的な言い方で大変申し訳ありません。ありがとうございます。

取りまとめを最終的にいたしましたものについては、委員全員の皆様に事務局からメール等でお送りさせていただきますので、御確認をいただければと思います。そして、このまとめ案につきまして座長の私から盛山文科大臣にお届けをさせていただきたいと、また御説明させていただきたいと、今後進めていきたいと思っております。

そしてまた併せまして、広くこの内容を広報するイベント等についても検討をしていきたいと思っております。この内容を広報したいと考えておりますので、この辺についても事務局において今後検討し、また皆さんに御連絡をさせていただきたいと思っております。よろしく願いいたします。

それでは、本日の議題はちょうど時間にもなりましたので、以上とさせていただければと思います。では、次回以降の日程等について事務局から御説明いただいて、最後に矢野文部科学審議官、おいでいただいておりますので御挨拶を頂戴できればと思います。

では、事務局から説明をお願いします。

【保坂留学生交流室長】 本日まで日本人学生等の派遣を中心に活発な御議論をいただきまして、誠にありがとうございます。

次回以降の日程については、また改めて御相談、御調整させていただきたいと考えておりますので、何とぞよろしくお願いいたします。

以上です。

【小路座長】 ありがとうございます。

それでは、最後に矢野文部科学審議官よりお話をいただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

【矢野文部科学審議官】 文部科学審議官、矢野でございます。本日は非常に御多忙な中、全委員、御出席賜りまして中間まとめ(案)とダイキンさんからの報告、大変熱心に御議論いただきました。私も非常に納得感がある熱い議論だったと思います。

この7月に発足いたしましたフォーラムでは、これまで4回にわたり5件の関係者のヒアリングを行うとともに、日本の若者、社会の成長と発展に向け意義ある留学を促進してい

くことについて、委員それぞれのお立場から文字どおり忌憚のない御意見を頂戴してまいりました。

今日、その御議論を成果物としてまとめていただいたということでございますが、今日頂いた議論もしっかりと反映させた上で座長一任ということをお願いしております、文科大臣に後日お届けいただくということにしたいと思っております。小路座長をはじめ、委員の皆様には厚く御礼を申し上げます。

文部科学省といたしましては、この中間まとめを踏まえまして各関係省庁や大学、経済界の皆様と緊密に協力しながら、若者の多様な成長を支える留学機会の提供に向けた経済的支援、体制環境整備、機運の醸成等にしっかりと取り組んでまいりたいと思っております。委員の皆様におかれましては、秋以降も外国人留学生の受入れなども含めて、イノベーションを起こすグローバルな人材育成について引き続き御議論をお願いしたいと考えておりますので、引き続き何とぞよろしくお願い申し上げます。

以上でございます。ありがとうございました。

【小路座長】 矢野文部科学審議官、ありがとうございました。

それでは終了といたしますが、最後に今回の中間取りまとめ、留学の入り口ということからグローバルイノベーション人材というものが大きく成長なり、輩出ができればというところが本質的な、あるいは究極的な目標であって、留学というのは、それを達成するため一つの手段だと思っております。留学とか派遣を受け入れるのは、これは最終的な目的ではなくて手段だと思っております。こういったグローバル人材は何なのかという定義も、また皆さんとさせていただければと思っておりますけれども、そういったグローバルイノベーション人材をどう輩出していくかということに必ずつなげていくとしていければと考えております。今後、このフォーラムを続けさせていただきたいと思っておりますので、また皆様から様々な御経験を踏まえて御意見、御指摘を頂ければと思っております。

それでは、本日の議題は全て終了いたしましたので、これで終了とさせていただきたいと思っております。大変お忙しい中、御協力いただきましてありがとうございました。

— 了 —